

「山陰職人の会」から方々から、それぞれの生き様を学ぶ
＝音楽から学べたこと(自分を愛す一助)＝

音楽好きの、単純でお馬鹿で、変わった二人のジョイント

(妻)佐々木みどりの音楽プロフィール (好きこそもの上手なれ、「凡才も努力続けりや“すごい人”」)

ご幼少のみぎりから風呂場で歌っていました。

音楽の授業は、中学3年で終わりました。高校では選択科目だったのでとりませんでした。

大学生の頃は、ハモリに加わると、絶対はずすという特技を持っていました。

隣で歌っている人から白い目で見られることもたびたび・・・しかし、あきらめませんでした。

恥ずかしげもなく教会の聖歌隊練習に加えていただきました。

その結果、混声4部合唱でも、自分のパートを死守できるという奇跡が起こったのです。

これでやみつきになったのか、調子こいて、社会人になってから職業音楽人の友人たちから手ほどきを受けるチャンスを得ました。

ためらう彼らのお気持ちを無視して、「一緒に歌おう」などと無理やりジョイントしてみたり・・・苦節〇〇年！
その友人たちは、歌手のたまごを養成する学校の教師や、その昔ヤマハのポップコンというコンテストでファイナルに東京まで行った人などなど・・・よくぞ私を見捨てないで受け入れてくださったものです。

こうしたドラマがあって、今ではダンナのピアノ演奏に合わせて歌うまでの進化を遂げたのであります。

力を貸して下さった方々に、感謝多謝でございます。

(夫)佐々木真悟の音楽経歴 (天与の才能があったとしても、「努力しなけりや“ただの人”」)

幼少期には、グループサウンズに憧れて、コタツをステージに見立て“ほうき”のギターを抱えて歌っていました。

1972年松江市持田小学校に入学、カワイオルガン教室でオルガンを学ぶ、この頃から、夜は父の通いつけの居酒屋(食堂)で伴奏ナシ(アカペラ)で流しのボランティアをおこなっていました。

レパートリーは、坂本九が歌う「里見八犬伝テーマソング」、山田耕筰の「からたちの花」、「荒城の月」、「美空ひばりメドレー」などでした。

1972年小学校の学芸会では、ほとんど意識することもなく、たいした練習もせずに“三匹のコブタ”を独唱する予定でした。が、しかし多くの聴衆を前にして極度の緊張が襲い、思考回路の完全停止という異常事態に陥りました。その結果、ピアノの前に立ちすくみ「真っ白な体験」を満喫させていただきました。

1973年「オルガンなんて男のやるもんじゃない」と言って、^{おじ}叔父の説得も振り切り勝手に止めてしまいました。

1974年小学校の音楽教諭(女性)にみそめられ、合唱部のソプラノパートに抜擢されるが、なんと男子は2人だけしかいなかったのです。

その頃、私のボーイソプラノに魅了され、男子禁制の宝塚に行かせようする無謀な計略をする先生も出現？

「山陰職人の会」から方々から、それぞれの生き様を学ぶ
＝音楽から学べたこと(自分を愛す一助)＝

小学校5、6年生の2年間は合唱部の部長を強制的に務めさせられました。

1976年松江市立第二中学校に入学、やはり合唱部の音楽教諭(女性)に目をつけられ、勧誘をされましたが、入部を拒み長年の呪縛から開放されました。

しかし、音楽の時間は女子生徒よりも高い声(ボーイソプラノ)のためにとっても気持ち悪がられました。

中学2年生となって、同級生の友達からバンドを組まないかと勧誘され、快諾します。

「ロックバンド「クイーン」のコピー演奏をするなら、ボーカルはピアノも弾けなきゃ」と言われて、当時島根大学特音で使われ続けた中古ピアノ(KAWAI)を3万円で購入してもらい、独学でピアノの練習をはじめました。

1979年島根県立松江北高等学校の普通科に入学、勉強そっちのけで引き語りとバンド活動に勤めます。

1980年高校2年生時、バンド友達から「助っ人」の依頼を受け、1979年より勝部俊行先生が創設されたコーラス部にテナーとして入部、松江北高は、島根県内の合唱コンクールにてNo.1の実績をうちたてる。NHK杯の全国合唱コンクールにて4位になりました。(その2年後、松江北高はNHK杯の全国1位の栄冠に輝くこととなります。)

その頃、ロックバンドが全盛期であり、TOTO、マイケルシェンカーグループなどの曲を演奏するために、勝部先生からの承諾を得て、広い音楽室をかりてコンサートを開催して楽しみました。(噂によりますと卒業後に、音楽室でのコンサート活動は、一切禁止になったらしいです、誰のせいかな?)

1981年高校3年生時、音楽室の傍らにある教員室にて、勝部先生から「声楽家を目指さないか」と言う、ありがたいお誘いがありました。ところが「声楽家は儲かりますか？」と音楽家にあるまじき質問を先生に浴びせると、「少し難しいかもな～」という先生の回答。即答でお断りしました。(←人生の岐路に立っていたと回想される。)

しかし、「この貴重な声楽家へのお誘いの言葉こそが、後に自尊心を保つための鍵となります。

1982年広島工業大学に入学、友達の紹介でバンドのキーボードとして参加、作詞・作曲も行なう。

広島の(ライブハウス)ウディー・ストリートにトリとして出演するが、練習態度が悪いと、当時のバンドリーダーから「辞めてくれないか」という申し出があり、受諾する。

就職してから音楽活動はやらないで、趣味でピアノを弾く程度となる。

2001年みどりと結婚。

2006年仕事上におけるトラブルのため落ち込んでいたが、70年代のポピュラー音楽を中心としたライブハウスでの演奏があると知り来店する、気がつくともライブハウス「キャロット」にUNDER BAR(アンダーバー)として夫婦でデビューすることになっていたのには驚きました。

2010年から身障者施設や老人介護施設などへ出張公演などをボランティアでやっています。

注:勝部敏行先生は、テノール 経種廉彦(イダネ ヤスヒコ)バリトン 妻屋 秀和(ツマヤ ヒデカズ)などの声楽家を多数輩出されました。